中尉殿が貴様の
体をご所望だ

一

小国の奪いあいで、二つの国が長く戦いつづけていた。

お偉いさんが血気盛んに戦いを推しすすめるも、停滞しがちな長期化による士気低下、深刻な兵糧、物資不足などで前線の兵士は息も絶え絶え。

それでも、軍隊が壊滅しないのは、国のトップ以上にカリスマがあり、人の心のヨリドコロとなる絶対的な支柱が、現場で腰を据えているからだ。

彼は中尉であり、その名はガロン。
巨体にしてゴリラのように筋肉質で、これまたゴリラのように顔つきがいかめしい。
ただ、その凄みで部下たちを、むやみに怯えさせ委縮させることはない。
なんなら、部下を背に負うように先陣を切って「だれも死なせるものか！」と奮闘してみせる。
恵まれた体格と相まって、その戦闘能力は、軍のなかでずばぬけているものの、決して味方に手をあげることなく。
もし、部下がバカをやったり、失態をさらしても「わたしの教育が足

りなかったのだ！」と神に許しを乞わんばかりに跪いて号泣。
オオゲサなほど嘆き悲しむのを見て、もらい泣きをし「中尉！俺が、俺がワルカッタんですうう！」と改心して、そのほとんどが彼の崇拝者になるのだとか。

弱肉強食が当たりまえの過酷な軍の世界にあって、強いだけでなく母のように心が広く包容力があるガロン中尉が、存在しているのは、奇跡のようなも。

そりゃあ、まわりは熱狂的に支持をし「この世には、この人がヒツヨウだ！」「俺の命を捧げて、生かさねば！」と奮起をするので、どうにか沈没しかけの船のような軍隊が踏んばれているわけだ。

スパイを通して、そうした内情を知った敵対国は「ガロン中尉が死ね

ば、あの国は終わる」と判断。
そして彼を貶めるために、送りこんだスパイが、俺だ。

俺はスパイでも、おもに色じかけを担当。
子供のころ、男相手に商売をしていたのを見こまれて、国に飼われ育てあげられた。

そう、そんな俺が送りこまれたとなれば「軍神にして聖母」と崇められるガロン中尉にも、つけいる隙があるということ。

スパイの報告によると、毎夜、彼は部下を自分の部屋に呼びつけるという。
相手は特定でないに、節操なく食いちらかしているよう。

ただ、コノミはあるらしく、あまり雄雄しくない、控えめな性格でかわいい顔をしたの。

こういったムサイ男だらけの戦場では、女役を強いられるヤツで、その特徴は俺にばっちり当てはまるし、スパイとして抱かれる訓練もしてきた。

ガロン中尉を色じかけでロウラクさせるミッションに最適とあり、すでに、もぐりこんでいる手引きによって軍に入隊。

ひととおりの訓練と教育を受けてから、だれも行きたがらない前線に配属を希望すれば、すんなりと通り、晴れてガロン中尉のおひざ元に。

まあ、とはいえ、さすがに、配属直後に、呼びだしはしないだろうと

思っていたのだが。
前線に到着して、三日しか経たずに直属の上官から「ガロン中尉が貴様の体をご所望だ」と伝えられて。

「わたしのと貴様のとくっつけて、強く手でにぎりこむんだ。そのまま、貴様が腰を押したり引いたりして、こすってみろ」
云われたとおりにするため、まずは自分のズボンとパンツをずらし「し、失礼します」とガロン中尉の紐パンの結びを、ほどく。
お目見えしたのは、俺と変わらないサイズで、これといった特徴もないの。

体格からして、キングオブ男な巨根なのかと思っていたので、拍子ぬけしつつも「中尉殿、かわいい・・・」とはあはあ涎を垂らし、俺のとまとめて両手で絞めつける。

「はあう、き、貴様の、すご、ぐちゃ、ぐちゃで、固い・・・！」と悩ましげに吐息したのに、鼻血を噴くほど興奮し「中尉・・・！」と遮二無二、腰を動かし、じゅっぽじゅっぽじゅっぽ！

自分が抱かれているときは演技で鳴いていたものを、どうやら、ホンライ、俺はあまり喘がないらしい。

今までになく、快い痺れが全身に走るのに、濡れた吐息をするばかり。一方で、ガロン中尉は野太い声で、商売の女よりヨガってみせ、でも、

わざとらしくなく、イタイケでしおらしくて。

「ああ、あん、ああう・・・！あひ、あ、あ、すご、ぬる、ぬるう・・！は、はあ、はう、はあん、き、貴様、気もち、か・・・？ひゃあん！あひ、ひ、おっき、く、う、いい、ぞ・・・！いいぞ、わたし、も、もお・・・！」

「くうあ・・・！」と俺、「あひいいいー！」とガロン中尉、ほぼ同時に精液を噴出。

白濁の液体がべったりとつき、ドレスのなかが悲惨なことになったとはいえ、申し訳なさを覚えるより、鼻血を垂らしつづけ、ちんこも滾らせたまま。

中尉のも、はちきれそうにケイレンしっぱなし。

吸血鬼は短小なのが恥ずかしい

一

昔は人の生き血をすすらないと生きられなかった吸血鬼も、時代の流れ、テクノロジーの発展によって変化。
人工血液をつくりだし、また飲まなくても、輸血をすることで生命維持が可能に。

おかげで人を襲わなくてもよくなったとはいえ、やはり生き血をすすって得られる力は絶大。
新鮮な血を飲んだだけ吸血鬼は強くなり、また、男女としての魅力が増す。

端的にいえば、女はお尻とおっぱいが豊満になるし、男はあそこがビックに。

生きた人の首に齧りつくなんて、もってのほか、血を見るだけで目眩がする、ヘタレな吸血鬼の俺は、だから、短小だ。
体つきは成人男性の平均並みでも、股間は毛の生えていない幼児のよう。

そんな体の一部に、すこし劣等感がありつつも、平和主義というか、オタク活動さえできれば、吸血鬼として弱くても、まわりに「格下」と嘲られても、どーでもよく。
なんて、無関心でいられる立場ではないのだが。

父は千年を生きる吸血鬼のボス的な存在であり、俺は最近、生み落さ

れたその末っ子。
ちなみに母は、出産して間もなく亡くなったとか。
母がいない分、百人以上いる妻たちのいざこざに、巻きこまれなかった。
とはいえ、だ。
「さあ！我が子たちよ！多く子をなし吸血鬼界を繁栄させるのだ！」
と日日、父が子供たちに発破をかけているものだから。
短小なのを恥じて、子づくりどころか童貞も卒業できない俺を、まわりは笑いものにし「お父さまの顔に泥に塗って」と軽蔑して。
父も父で「どこまでも、わたしに恥をかかせるのだ！」とやかましいったらない。

ただ、そんな騒音に悩まされる以外は、短小のへっぽこ吸血鬼なりに、わりと満足した人生を送っている。

漫画喫茶の深夜帯に働くのは、オタク冥利につきるし、食うに困らないで、オタク活動に専念できているし。
どうせ不老不死なら、人より長くじっくりオタクの歴史を見守りつづけ、オタク人生を謳歌したいと願ったのだが。

早朝の仕事あけ。
日の出の関係で、そのまま漫画喫茶に居すわることもあるとはいえ、今日は大急ぎで帰宅。

愛するアニメのイベントを配信で見る予定で、それまで家事や雑用を済ませ、万全で臨みたかったので。

「日中のイベント参加できないあたりが、吸血鬼オタクのヨワミだなあ」とぼやきつつ、人気のない細道を走っていたところ。

突然、うしろから抱きつかれ、口をタオルで塞がれた。
強烈なにんにくの匂いに、耐えきれずに、ばたんきゅー。

目を覚ますと、古風な軍人のコスプレをしたような男たちが五、六人、
うす暗く狭い部屋でわいわい。
俺は椅子に座らされ、手と足は拘束。

まっとうにオタク人生を歩んでいる俺に、闇の住人との接点はなく、
狙われる覚えもまったくなく。
「ヒトチガイでは？」とあたりを見回し、目にはいった、おそらくこの組織のシンボル。

コウモリのイラストにバッテンがしてあるデザイン。
すべての吸血鬼を殲滅して、この世に平和をもたらすことを目的とした、敵対する組織だ。

とたんに「うわあ！こんなミゴトな短小、見たことねえ！」と噴きだされ、ほかの男もわらわらと。
「こんなんで、どーやって女抱くんだよ！」「軟弱で短小の吸血鬼ってマジ受ける！」と暴言フルボッコで大笑い。

吸血鬼として侮られても屁でもないが、衆人環視で裸にされて、身体的特徴をバカにされるのは、さすがに屈辱。
頬を熱くし、目に涙を浮かべつつも「笑うだけ笑って萎えてくれれ

ば・・・」とすこし期待したのだが。

「ていうか、勃起したら、どんな風になんだろうな」

「お、そりゃ、云われてみれば、興味ある！こいつ未成年じゃないんだろ？」

「そーそー少年の勃起を見ようとしたら犯罪になるけど、こいつ成人だし」

「強姦も犯罪になりますけど！？」と指摘したかったものを「はひいん・・・！」と口から洩れたのは甲高い喘ぎ。

一人が背後に立ち、椅子を挟み腕を伸ばして、股間をまさぐりだしたから。

みんなに見えるよう、人差し指と中指でつまみ、人差し指でこしょこしょ。

生き血をほとんど飲んでないせいか、短小だからか、ふだんの俺は性欲があまりなく、射精もしにくい。
たまに、ちんこがむずむずしても、勃起させるには手間暇がかって、なんなら自慰をめんどくさがるほど。

人に触られるのは、生まれてはじめてで、とはいえ、いつもどおり、反応が鈍くはなく。

「は、はあ、はあん！や、やめ、そ、んなあ、指で、先っぽ・・・ひいあ、ああ、あ、あ、ああう・・・！」

即行でちんこが膨れあがって、お漏らしが溢れだし、指でにゅちゃにゅちゃと。
いつもの自慰とは比べものにならない快感に襲われて、やだやだあんあん身悶えているうちにも、男どもは卑猥な感想を。

「立ちはしても、大人の勃起に比べたら、ずっとグロテスクじゃねえわ。
男を犯すとき、たまに、ちんこが目に入って萎えることあっけど、いやあ、これなら燃えそう」

「分かる分かる。女に近い・・・いや、少年っぽいから、自分が小児性愛の犯罪者になった気分になるけど、それが、むしろ、いいっつうか。
子供サイズのちんちんにイタズラすんの、合法的にできるなら、さい

こーじゃん？」

「まだ身も心もがケガレテイナイ少年のような、ツルピカちんこだから、先走りが甘そうに見える・・・」

俺のおっぱいを見世物にしないで

一

小学生のころ、俺は「横綱」があだ名のおデブちゃんだった。

特徴的な体格をしている子供はイジメられやすいものだが、相撲取りのマネをしてクラスを湧かせいてた俺は、陽キャの人気者。その地位を保ったまま、卒業まで学校生活を危なげなく過ごせると思っていたのだが。

ある日の一人の下校中。

クラスメイトの男子が道に跳びでてきて「なあ！おまえのおっぱい触らせてくれないか！」といきなり頭を下げてきた。

イタズラか罰ゲームかと思いきや、彼の語った事情は、アホっぽくありながら嘘ではないようで。

なんでも、三度の飯よりおっぱいが大大大大スキなのだという。

はっきりと自覚したのは、ここ一年くらいで、ただ、小学校高学年にもなると、母親のおっぱいに触るのはタメラワレルし、ほかの女性、女子の胸に手を伸ばすなんて、もってのほか。

現実にはムリだからと、おっぱいの代わりになりそうなアイテムを探しだして、いろいろと試したが「これじゃない」「なんかチガウ」と悶悶とするばかりで、ヨケイに欲求不満になったとか。

「このままでは、暴走してクラスの女子を襲いかねないんだ！」と泣

いて懇願するのに、女体には人並みにしか興味ない俺は共感できず「ええー」とすこし腰が引けたものを。

ふだんから、男子にべたべた触られて慣れっことなれば「胸だけはヤダ！」と腕で隠して頬を赤らめるのも、逆に恥ずかしいような。
「クラスでおっぱい騒動が起こるのもイヤだしなあ・・・」とも思い、ただし「学校では禁止。学校外でダレもばれないように」と条件を提示。

とたんに目を輝かせ「も、もちろん！」とうなずきつつ、彼も彼で「おっぱいを触っているときは、いつものように、おちゃらけないでほしい」と条件を。

フザケテじゃれるのではなく、黙黙と真顔でおっぱいを揉むのか？

やや寒気がしたとはいえ、突っぱねたいほどではなく「ま、いっか」と俺の家につれていき、おっぱいを差しだした。

そりゃあ、はじめは、くすぐったし、気まずかったものの「はあああー！ありがとー！」と仏を拝むように、ありがたかられれば、わるい気はせず。
そのあとゲームで白熱して心ゆくまでタノシメたし、すっかり意気投合したし。

以降、三日に一回くらいに俺の家でおっぱい接触会を。

揉まれている間に持て余すチンモクに慣れてしまえば、触られること自体は、イタクも痒くもないから、どうってことなく。
俺にしたらゲームで遊ぶほうがメインで「新しく、気のあう、いいト

モダチができた」と浮き浮きしたもので。

ただ、彼のほうは、いくら、おっぱいを揉んでも、ゲームをしても満たされることがなかったよう。

そのうち「だれにも見つからないようにするから！」と学校でも求めだした。

そりゃあ、快諾できなかったとはいえ、断ったら断ったで「ガマンさせるほど反動がでて、わき目もふらず、人前でおっぱいを揉みしだくかも」と逆に危険に思えたし。

報酬として、スキな給食のおかずやデザートをくれるというに、まあ、結局、食い気に負けたというか。

「今のところ、約束を守ってくれて、人にばれてもいないしな」と油断もしたのだろう。
そうして隙ができたことで、まんまと学校で盗み見をされてしまい。
しかも相手は厄介な学年一の優等生。
中学受験を控えて、かなり鬱屈としていたらしく、俺はカッコウのサンドバッグ、ストレス発散の道具にさせられたわけだ。
イジメの内容は惨すぎて、筆舌に尽くしがたいから省略。
表むきのクリーンな優等生のイメージを保つために「もし、チクったら、おまえがおっぱいを揉まれるのがスキな、変態のホモだって暴露してやる」と脅して口止めしてきたので、だれにも泣きつけず。

一人で重度の悩みを抱えこみ、どんどん心を病んでいった俺は、そのうち「おっぱいを揉ませてくれ」と頼んできた彼を、イジメっ子より、憎むようになっていった。

あいつが、俺のおっぱいを求めなければ、イジメられなかったのに、と。

ビキニの布は薄いから、すぐにぷっくり浮きでて、色も透けて、つい目をやったのを「や、やだあ・・・！」と瞼を固く閉じる。

布越しの薄紅の乳首に「おお、まあ、ぴちぴちに膨らみきって・・・」

「透け透けで、なんと淫らな・・・」とどよめく男どもの視線が集中しているようで「は、あ、見る、な、あ、あ、ああ・・・！」と腰が火照って疼いてやまない。
「おお、下も透けてきたぞ」と聞こえて股間に薄目をむければ、白い水着越しに浮き彫りだし、側面からは丸見えだし。

「や、見な、でえ・・・！」と頬を熱くして泣きつつ「足を閉じるな」とリュージの命令に従い、腰をくねくね、太ももをぷるぷる。

さめざめと俺が恥じらうのにヨウシャなく、リュージは胸の下をつかんで、おっぱいを突きあげてみせる。
より天辺の膨らみが強調されるし、揺すられて布が擦れると、もどかしくも、あんあん悶えてしまうし。

おまけに、そうやって見せつけるおっぱいも、ちんこも視線で撫でられる錯覚がし、快感が体にほとばしって、どうにも堪えきれなさそう。カメラを通しての無数の視線が、体を這っていると思えば、もう、もう・・・。

「ひいあ、やあ、やらあ、だめえ、そ、な、おっぱ、いっぱ、見ちゃ、やだあ・・！はひい、ひいん、あふう、あ、あう、すご、きも、ち、い、の、だめ、だめえ、はあう、ひう、ひいやあああー！」

おっぱいをかるく揉まれただけで、しかも大勢の男の眼前で、どっと精液を噴出。

羞恥に苛まれ、ぼろぼろ涙をこぼしながらも、今まで覚えたことがな

い、莫大な快感が体に染みて、涎を垂れ流しにあひあひ。

もちろん、俺があられもなく射精したくらいで「少年の凌辱ショー」が済むわけがなく。

今宵も探偵は推理
しないで俺と×××する

一

ホームレスだった俺は、高校のころの同級生、住原に拾われた。

今は探偵をしているというに、その事務所で寝泊まりしながら、事務仕事や電話番をしている。

で、たまに、つれていかれるのがラブホ。

いや、住原とは恋仲でないし、性処理につきあわされるわけでもない。

彼はラブホで起こる事件事故を専門に扱う探偵だから。

一方で俺は助手というか、現場検証を元に再現する、エッチの相手役

というわけ。

仕事にかこつけて、セックスしたいだけの悪質な助平じゃあ？
もしくは、えらく手のこんだ、そういうプレイなの？

そりゃあ、俺もはじめは、ふざけているのかと思ったものの、ジッサイ、エッチを忠実に再現したことで、前回は、なにがあったのか解明できたし。

おそらく現場の状況を見ただけで、その真相には考えが至らなかっただろう。
調べるまえは「他殺」と思えたのが、再現エッチを通して「事故」と判明したり、その逆もまたしかりで、結果がくつがえることがあるよう。

それにしたって、ラブホの事件事故の詳細を、エッチしてまで調べをつけて、だから？
それは警察の仕事でしょ？と思うところ。

ラブホという場所は特殊なので。

裏社会の人間がよく利用するし、関連してのトラブルが起きやすいし、ホテル内におさまらずに、その波紋が抗争に発展することもある。
まあ、ラブホ自体、堅気でない人が経営したり、オーナーの素性があやしかったりするし。

とはいえ、たいていのラブホ側の人間は、できるだけ裏社会のややこしい揉めごとに巻きこまれたくなく、組織の恨みも買いたくない。

通報するにしろ、ことが公になるまえに、組織と話をつけたり、不都合なことをもみ消すなど、内々に処理をしておきたいわけだ。

個人的な痴情のもつれや愛憎劇、たんなる不運な事故なら、その必要はない。

とはいえ、ラブホの従業員やオーナーは、部屋の惨状を見ても、なにが起こったのか、どうすべきなのかは判断ができない。

代わりに推理をして、というか、再現エッチをして、謎を解き明かすのがラブホ案件専門の探偵たる、住原の仕事。

さて、今回、依頼してきたオーナーがいうには、部屋に女性の絞殺死体があったとのこと。

相手の男は退室済みで、ルームサービスの食事を持っていった従業員

が発見したとか。

この女性がなかなか厄介らしい。

ラブホのある地域一帯で、イチバン勢力がおおきい組織Ａのボス、オキニイリの愛人。

さらにメンドウなことに、ホテルでイッショだったのは組織Ｂのボスの息子。

顔の輪郭に沿って、ナイフによる長い傷跡があり、監視カメラでカクニンしたので、マチガイないそう。

大物の愛人に手をだしたこと自体、えらいこっちゃなのだが。

組織Ｂは、組織Ａに次ぐ力を持っているし、この両者の因縁は深い。

尻の腫れが引かないうちは、とてもエッチする気にはなれず。
いやエッチどころか、口を利くのもオックウだったのが、膝の裏を持ち上げられたのにはっとする。

目をむけたときには、すでに遅く、住原が俺の股間に顔を埋めて。
萎んだそれが、生温かい口内に含まれ、ねっとり舌に巻きつかれ、しゃぶしゃぶされ「ば、やあ、この、くそ、探偵・・・！」と罵倒しつつ、甲高く鳴いてしまう。

前回「俺は数知れない男女をイカセテきた探偵だ！」と自慢していただけあり、尻を叩かれて、すっかり縮こまった俺の息子が、あっとい

う間に、ぶくぶく太って。
住原の口と舌にレイプされるのに、されるがまま、あんあんヨガって先走りをだらだら。
お漏らしをまた、住原が口をはなして、ねちゃねちゃと舐めやがって。
舐めとるだけでは飽き足らずに、先っぽを咥えこんで、強く吸引をするのが、もう、もう。

クヤシイかな、俺の体を知りつくし、手にとるように快感を引きだしているが如く手管。

巧みな分だけ、推理するためとかどうとか、これまで多くの男女の股に顔を埋めてきたのかと思うと、すこし胸がもやもや。

なんて、考えごとをしている余裕はなく、先っぽを舌でじゅぽじゅぽ、

えぐられながら、ぢゅぶううう！と唇に吸いつかれて、快感の大波が押し寄せてきて。

「や、だめ、ば、かあ、そ、な、強、吸う、は、はあ、ああ、あ、あふ、ふひいあああー！」